

2005年の
チャレンジ

ポローニア
paulownia



筑波大学附属学校教育局 vol.2

■新春号にあたってのご挨拶

占春園に吹く風●谷川彰英……………1

■学校紹介

中等教育段階でのリーダー形成カリキュラムの構築を目指して●向高祐邦……………2

総合学科のモデル校として●服部次郎……………2

明治41年附属小学校補助学級として発足。
養護学校として43年●柳本雄次……………3

桐の木のように●千田捷熙……………3

自閉症児を対象とした養護学校●西川公司……………4

■名物先生紹介

井上先生から学ぶ事●大野 新……………4

教師は、授業から離れたらダメ!!●井上正允……………4

■退官のご挨拶

産学連携●金子 守……………5

未来への曙光を●飯野順子……………5

■TOPICS

第45回数学オリンピックで附属駒場高等学校の生徒が入賞……………6

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

占春園に吹く風



附属学校教育局教育長
谷川彰英

附属学校教育局がある東京キャンパスの奥に「占春園」という庭園がある。東大の三四郎池ほど大きくはないが、静かな池と四季折々の木々が私たちを優しく迎えてくれる。

教育局も含めて今の教育の森公園、附属小学校までの一帯は、もと東京教育大学のキャンパスだったところだが、さらに歴史を遡ると、江戸時代、陸奥守山藩主松平大学頭の上屋敷であった。俗に大塚吹上と言われていたところである。占春園はその大塚吹上の庭園であった。江戸時代には青山の池田邸、溜池の黒田邸と合わせて、江戸三名園といわれた由緒ある庭園である。

池のほとりに、延享3(1746)年に建てられた碑が残っており、そこには次のようにある。

「我が公の園は占春と名づく。その中観る所は、梅桜桃李、
林鳥池魚、緑竹丹楓、秋月冬霜、凡そ四時の景有らざるは莫し。」
(原文は漢語)

この守山藩というのは、現在の福島県郡山市にあった藩で、水戸家の分家に当たる。ということは期せずして筑波大学のある茨城県ともつながりがあったことになる。

年が明けて、新春の抱負を語る時期に、この由緒ある占春園をゆっくり歩いてみたいだろうか。庭園のほぼ中央に長く東京高等師範学校の校長を務めた嘉納治五郎の像も建っている。

東京キャンパスは春一色といえるのだが、大学そのものには厳しい木枯らしが吹いていると言っている。昨年4月にスタートした国立大学法人化によって、財政面では削減が続き、手をこまねいていたら、それだけで取り残されていく様相である。

幸か不幸か、附属学校についてはまだ木枯らしが吹きつけてはいないが、この一、二年で厳しい壁に直面する可能性が高い。附属学校教育局も、その来るべき風への対応策を模索している。附属学校の校舎等の修繕など財政的な課題は大きいし、教職員の確保などの問題も深刻化している。さらに、中期計画に掲げた内容を実現しなければ運営費交付金も減額されていく運命にある。

今回時事通信出版局と締結した産学連携事業も、その対応策の一環であり、今すぐ大きな効果は望めなくても、必ず各附属学校に資する結果を得られると確信している。大学を含めて学校というところは保守的なところで、「これまで通り」といえば、誰も文句をいう人はいなかった。法人化された今、そのせりふは通用しない。「何を变えようとしているか」が常に問われる時代に突入した。それが現実である。

占春園は何も語らないが、この附属学校教育局にどんな風を吹かせるかは、私たち一人ひとりの決断と努力にかかっている。

中等教育段階でのリーダー形成 カリキュラムの構築を目指して

附属駒場中・高等学校長
向高祐邦



本校は、中学が1学年3学級約120名、高校から新たに1学級分40名が加わり4学級となり、中・高合わせて全校生徒数約840名の国立大学法人としては唯一の男子校である。

また、中学からの入学者は、全員無試験で高校へ連絡進学しているのも本校の特色である。開校当初より、真の人間形成を目指す中・高一貫教育を柱とした教育実践および研究に力を注いできた。このような中・高一貫教育を行うために、教師は中・高併任で、中学の学級担任であっても高校の教科も担当している。生徒たちは、水田実習を初めとする多くの学校行事や部活等を通してリーダーシップやフォロアシップを身につけている。学外での催しにも積極的に参加し、毎年、数学オリンピック等の国際大会や全国大会で多くの生徒が優秀な成績を挙げ表彰されている。

法人化を契機に、大学と協力して社会の要請に応じた先導的な教育研究を行うことが、これまで以上に教育研究の現場として求められ、本校は、上記の特色とこれまでの実績をもとに、中等教育段階における「トップリーダーを育てる教育の実験的实践」をこれからの課題とすることになった。ここでのトップリーダーは、もちろん分野を限定するものではなく、広くいろいろな分野を期待するものである。今、人間総合科学研究科の先生方と筑駒中等教育研究会を立ち上げ、科学研究費および学内プロジェクト研究費を得て、カリキュラム研究が進行している。

高校は平成14年度にスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の研究開発校に指定された。このSSH推進のために、筑波大学の3研究科10名の先生方にも運営指導委員をお願いするとともに、また多くの先生方に出前授業をお引き受けいただいている。これからもより密接な高大連携を図り、将来、社会のトップリーダーとなる、足腰のしっかりした生徒の育成を行っていききたい。



総合学科のモデル校として

附属坂戸高等学校長 服部次郎



附属坂戸高等学校は、埼玉県中西部の坂戸市に所在します。昭和21年の創立以来、農業を主とする専門学科の附属高校として40年余の歴史を刻みました。平成6年度、文部省が推進する高校教育改革パイロットモデル校として、全国初の総合学科に改編しました。選択制・単位制の教育課程、「産業社会と人間」科目開発、「課題研究」発表会など、総合学科の諸課題を研究開発し、成果を全国に発信してわが国の後期中等教育の発展に大きな貢献をしてきました。

総合学科は、選択科目を系列で括って、教育の特色を表しますが、本校では「生物資源・環境科学系列」「工学システム・情報科学系列」「生活・人間科学系列」「人文社会・コミュニケーション系列」という四つの系列による教育を行っています。「大学で何を学ぶか」を学ぶ進学校であることを目標に、キャリア教育をベースにした総合学科の実現に努めています。

本校は、男女共学・1学年4クラス計160名・総定員480名の生徒数です。校地は、総面積7ヘクタールの緑豊かで広大なキャンパスです。施設・設備は、作物や家畜を育てる農場、工作機械の並ぶ工場、ロボット実習のできるメカトロ実習室、広い調理室や被服室に福祉実習室、ビジネス実践室や商業デザイン室など、多彩な科目選択を可能にする充実した学習環境です。

附属学校は、教育実習が使命ですが、本校でできる教育実習は普通科目だけでなく、農業・工業・家庭・商業・情報・福祉という専門教科の実習ができます。明るく素直で堅実な生徒の多い筑坂は教育実習に最適な附属高校です。筑波大学の教員および学生の皆さん、筑坂を今後ともよろしく願い申し上げます。



明治41年附属小学校補助学級 として発足。養護学校として43年

附属大塚養護学校長 柳本雄次



本校は、東京ドームや小石川後樂園を見下ろす高台にある、知的障害のある幼児児童生徒を教育する養護学校です。明治41年に東京高等師範学校附属小学校の補助学級として設置され、その後昭和35年に養護学校として独立して現在に至っています。

本校の教育・研究の特徴を次に3点ほど挙げます。一つ目は、知的障害教育の長い歴史と伝統を継承し、カリキュラム開発を中心とした実践研究で多くの実績を残してきたことです。今日も個別教育計画の作成—実施—評価／改善に基づく質の高い教育支援を目指して、大学の関係教員の指導を得ながら全校体制で研究を進展させています。その成果は毎年2月に開催される研究協議会で報告し、全国から参加の300名余りの教員と協議を重ねています。

二つ目は、本校の中期目標に掲げた知的障害に関わる特別支援教育の推進です。昨年度から支援部を立ち上げ、所在地の文京区を圏域とした地域支援モデルについての実践的研究に取り組んでいます。特別なニーズのある子どもたちの教育支援のあり方について、区内の幼稚園、小・中学校及び保健・福祉等の関係機関と連携して様々な活動を展開しています。そのおかげか、今年度から始まった大学の社会貢献プロジェクトに採択され、関係者一同、さらなる活動の発展を実現したいと意気に燃えています。

三つ目は、知的障害教育では生活による生活のための教育を志向して、具体的な生活経験による学習活動が重視されています。中学・高等部になると将来の自立や社会参加を目指して作業学習が導入されています。本校では、焼き物、スリッパ、木工、総合印刷等の作業班があり、材料の調達から製作、販売まで一貫した活動を行っています。秋の大学の雙峰祭には生徒たちが参加して、作品の展示・販売にあたりますので、是非お出かけ下さい。



桐の木のように

附属桐が丘養護学校長
千田捷熙



本校は国立では唯一の肢体不自由養護学校である。

【伝統】隣接の整肢療護園の創始者として著名な高木憲次博士が昭和27年に、当時の東京教育大学に園児の教育を要請したことに端を発し、現在では入園生及び通学生対象の2つのキャンパスを持つ学校に発展している。主として肢体不自由の児童生徒に対する教育方法を研究・実践し、その成果を全国に発信して、日本の肢体不自由教育における中心的役割を果たしている。

【ニーズに応える】昨今は児童生徒の持つ障害が多様化しているため、本校も個々のニーズと要望を的確に把握し、保護者と話し合いながら、教育支援のプログラムを一層緻密に構築し展開していくよう日々努力している。個々のニーズと要望を拘い取り綿密な個別の指導計画を構築して教育活動を行うことにより、本校の研究実践が近隣の小・中学校を含む地域支援の一助となることを願っている。

【自己実現を目指して】学校の果たす役割は、知識教養を授け、生活する上で必要な基礎基本を教えることはもちろん、各々の自己実現のために、ことに臨んでゆけるがない自信と、良き友や師との交わりの中で培われる豊かな人間性を育むことだと考える。

本校で学んだ生徒の中には前在籍校では友人も少なく登校を渋りがちであったが、高等部に入学して見事に3年間で皆勤して卒業した例もある。児童生徒は皆、各々の不自由さを物ともせず、文化祭、運動会、宿泊行事、スポーツ大会や漢検、数検等の検定試験、図画・ポスターの展覧会等の活動を通して交友を深め、学校生活を謳歌している。校舎には明るく元気な声が飛び交っている。

【桐の木】校庭には1本の桐の木がある。天空に向かって直立し、緑濃い葉を繁らせているこの桐のように素直に育て、というのが我々教師の願いであり、桐が丘という校名の由来でもある。





自閉症児を対象とした養護学校

附属久里浜養護学校長
西川 公司

本校は、これまで重度・重複障害児を対象に教育実践や研究を行ってきましたが、国立大学等の国立大学法人化により、知的障害を伴う自閉症児を対象に教育研究を行う養護学校として、平成16年4月1日から、筑波大学の附属学校へ新たに仲間入りした学校です。

◆教育目標

幼児・児童の障害の状態、能力、特性等に応じた指導をとおして、一人一人の全人的発達を図り、その可能性を最大限に伸ばすことを目指す。

◆設置学部及び定員等

幼稚部（3～5歳児）6学級、定員12名、小学部（第1～6学年）12学級、定員48名で、現在、幼稚部13名、小学部31名の幼児・児童が在学しています。

◆研究活動

本校では、文部科学省の研究開発学校（平成16～18年度）の指定を受け、「自閉症児のための教育課程の開発に関する研究開発」に関わる研究を行っています。具体的には、①的確な実態把握法 ②自閉症児指導プログラム ③課題別指導セット ④効果的な指導体制と指導情報の共有化法 ⑤家族・家庭支援法の開発を通じて、自閉症児の指導に有効な教育課程を開発しようとするものです。なお、平成17年2月25日（金）には、本校を会場に、授業公開及び研究開発学校第1年次の研究経過報告を行う「自閉症児教育実践研究協議会」の開催を予定しています。

◆本校の特色

一人一人の幼児・児童の重点指導課題を設定した個別の指導計画に基づき、家庭や関係機関との連携の下にきめ細やかな指導を展開しています。また、本校では、保護者や地域住民等を対象とした授業公開、早期教育相談会、サマー教室、きらきらコンサート、パソコン教室、ボランティア講座等を年間を通じて計画的に開催するなどして、本校の教育活動や自閉症教育への理解を促す啓発活動にも積極的に取り組んでいます。



私の学校の 名物先生 vol.1

井上先生から学ぶ事

附属駒場中学校教諭 大野 新

同僚の紹介文ほど書きにくいものはない。特に教科が違えば、なおさらである。そこで、この4年間校務と一緒に司る立場から見た井上先生像をお伝えする。

何よりも感心するのは、精力的な発言と発表である。雑事の多い管理職にありながら、学会や研究会、教育誌での発表は数限りない。特に昨今の附属学校危機の中で、附属駒場の教育をアピールしたことは、非常に有効だった。6年間の一貫教育の中での生徒の変化をとらえた論文や、最近の生徒たちの姿から時代の変化をとらえる嗅覚は非常に鋭い。また、教科教育の分野でも斬新な発想で研究成果をあげていた事も実証済みである。

さらに人脈の広さも特筆すべき点である。初めての相手だろうが臆せず次々と出演交渉（講演会や研究会など）をまとめていくバイタリティー溢れる行動力には脱帽である。その押し出しの強さがしばしば強引な印象を与えることも事実であるが、昨年の法人化をひとまず乗り切った功労者の一人であることは間違いない。

教師は、授業から離れたらダメ!!

附属駒場高等学校副校長 井上正允



副校長になって6年が経つ。最初の2年間は中学の副校長であったから、中1の数学の授業を週に4、5時間持った。後の4年間は、高校の副校長で高3の数学C（選択）の授業を週4時間担当する。普段、やっかいで何年やっても慣れない（慣れたくない）仕事に追われている私にとって、授業は癒しの時間である。授業の準備も、時にきつと感じることはあっても、イヤではない。

今年教えている高3生は、中1で幾何を教えた生徒たちだ。頼りなげで、小学生気分を漂わせていた子どもが、今は立派な青年である。やんちゃでいたずらばかりして落ち着きのなかった子どもが、しっかり考えて発言し、答案をつくる。この6年間の成長が授業をとおして実感できる。「教師は授業を離れちゃダメ!!」なのである。

これまで多くの中学生・高校生と授業の中で関わってきたが、彼らの成長の過程を何らかの形で記述しておきたいと考えたことが、「読売教育賞」の対象になった論考をまとめる動機になった。

今回の優秀賞受賞（算数・数学部門）作品は「中1→中3→高2にみる数学関連図書の読後感の変遷—中高一貫カリキュラム構成の一視点—」である。学校で教えることのできる分量・内容はたかがしれている。それを補うために筑駒に赴任する前から、長期の休みに数学関連図書を読み感想文にまとめる課題を出してきた。

数学に対する興味・関心や数学観は、乱暴に言えば、
中1：内容の忠実な紹介とテーマ的な感想
中3：個性的・ホント的な数学観の出現
高2：自分の将来を見据え、これまでの算数・数学的体験を振り返りながら個性的・創造的な数学観が登場、という変遷をたどる。

学校数学の役割は、受験に収斂する詰め込みではなく、時間をかけ、じっくり彼らに数学と向き合わせることだ。

退官のご挨拶



附属学校教育局教授 金子守

国立大学の法人化が拍車をかけたのか、産学連携のシンポジウムや公開セミナー、産学連携による新事業を起こすための総会や懇談会などがいろいろな地域で開催されている。また、国立の教育系大学が連携して新事業を起こす具体的な準備が始められたというニュースも流れている。法人化後の財源確保という「至上命令」のもと、理系の専売特許であった産学連携事業を文系・教育系でもやらなければならない状況になったと言えるだろう。

筑波大学にはすでに産学リエゾン共同研究センターが創設され、ここを活動の拠点として、産学連携活動について、産学官による積極的な交流も行われている。また、昨年の7月9日には、本学と独立行政法人国立特殊教育総合研究所が教育研究協力で協定を締結するなど、本学は教育交流を促進することにも積極的である。

附属学校教育局は、谷川教育長の強い指導力で、全国でも珍しい教育系の産学連携について、12月17日に時事通信出版局との間で協定を締結した。これまで一年ほどかけて、どのような連携のしかたが考えられるのか、また、時代のニーズに応じた教育支援とは何かなど、出版局教育事業部のスタッフと折衝・検討を重ねてきた。

第一回連携事業として、「教員採用の在り方に関する研究」を起こすことになった。附属学校教育局と附属学校の教員が中心となって研究グループを構成し、教員採用試験問題の分析・評価を行い、新たな教員採用システムを開発するもので、本年の8月頃までに研究レポートを作成し、教育委員会などへ向けての提言をする、という計画を立てている。初めての連携事業ということで問題がないわけではない。今後、連携を進めるに当たっては、事業内容、受託・共同研究への参加の在り方、資金など、さまざまな面から検討を加えなければならないが、どのように検討しても克服すべき点は出てくるだろう。要は、今後の進むべき方向を見据えて、そのことをどう考え、どう対処していくかである。連携事業をなんとかやり甲斐のあるものにしたいものである。



附属高等学校長 飯野順子

東京教育大学の特殊教育学科を卒業し、都立の養護学校に着任以来38年となりました。流れる時、時のつらなりの一瞬一瞬に多くの方に出会い、巡り会うできごとから多くのことを学びました。その過程で、「すべてのわがには時がある。」こと、成熟するには時が必要で、時が来れば事が成ることが信念となりました。

今、特別支援教育への新たな展開の時となり、その理念としての特別な教育的ニーズへの高い専門性による対応を必要とするすべての人に、きめ細かく浸透するシステムへと発展させる責務が関係者には求められています。この理念は次のこと等を通して実現させたいものと思っています。私の体験的・実感的視点で捉えれば、毎日の授業の集積が、障害児教育の歴史を創ってきたと言えます。最近の話題では、たんの吸引や経管栄養などがある一定の条件の下で教員に認められたこともその例です。当初医師法違反に問われる等と言われながらも、教師生命を賭けて子ども達の苦しさに向き合った先生達がいる、歴史の道が切り開かれてきました。以来15年です。毎日事故がないよう「慎重・安全に」を合言葉に、授業の中でたんの吸引等に取り組んだ成果が評価されて、新たな法的見解が創出されたのです。

学校の生命線は、授業です。「実践の知」は「実践の省察を通じて得られる子どもの行動の見方・関わり方・教材のあり方等に関する経験の対象化・共有化」（特殊教育学会）を図ることから創出されます。盲学校には、そのような「実践の知」としての「学びの本質」に迫る授業づくりが多く見られます。視覚障害教育に初めて携わり、その独自の専門性に触れて、改めて障害種別の枠を超えて共通する基盤が多くあることに気づきました。

大学法人化及び特別支援教育への入口に立つ現在、全国に誇れるその財産の積極的な発信について、附属学校への高いニーズの再認識とアクションが必要です。

色づいた柿の葉の虫食い部分を見て、「腹ぺこ青虫が食べた。」と表現した幼稚部3歳児のMちゃん達の豊かな感性が、生き生きとした学びの環境の中で、健やかに育つことを、未来への曙光として祈念したいと思っています。

第45回 数学オリンピックで附属駒場高等学校の生徒が入賞

アテネオリンピック直前の2004年夏の7月、第45回国際数学オリンピック(International Mathematical Olympiad=IMO)がギリシャで開催された。附属駒場高等学校の生徒2名を含む日本選手6名は精一杯頑張ったが、国際順位では過去最高の92年8位と並ぶ見事な成績を収めた。高校3年生の入江 慶君、高校2年の栗林 司君が銀メダルを獲得した。二人の感想の一部を紹介する。

●入江 慶君

「2年間のIMOで得た本当の大きな収穫は、自分が普段住んでいる世界の他に、こんなにたくさんの素晴らしい人達がいること、その実感だ。IMOは世界の輝く側面を僕に見せてくれ、何か自分の人生が現実の世界を抜け出して広い世界と広がっていくような気分になる。僕はこれからどう生きていくか判らないが、それはIMOのような輝きに満ちたものであって欲しいと思うし、実際そうなるだろう。そう感じられるのは間違いなく2回もこのような素晴らしい大会に出ることができたからだと思う。」

●栗林 司君

「世界各国から数学好きが集まって一緒に遊んだり騒いだりできるなんて機会是一生の中でもIMOだけだと思う。行く前に想像していたよりずっと楽しかった。」



※一番左が入江君、その隣が栗林君

《編集後記》

2005(平成17)年の新春を寿ぎ、筑波大学附属学校教育局広報誌「ポローニア」第2号をお届けいたします。

昨年10月、創刊号を発行いたしました。編集に携わった者として、皆様からどのように受け止められたか、たいへん気になるのでした。これまでのところ、概ね、好評と激励の言葉をいただいております。意を強くしているところです。

さて、第2号では、谷川彰英教育長が年頭のご挨拶を申し上げます。また、創刊号では、紙数の関係で掲載できませんでした、附属学校5校の紹介をいたしました。これにて附属学校すべてのご紹介をいたしました。

今年の3月、定年で退官される予定の金子守教授、飯野順子教授のお二人からメッセージをいただきました。金子教授は国語教育、飯野教授は特殊教育のそれぞれの発展にご尽力下さいました。大変お世話になったお二人の先生方の今後ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

今回から、新企画といたしまして、各附属学校の個性豊かな名物先生に、スポットライトをあてて紹介をして参ります。

桐の樹「ポローニア」は、春を迎え、やがて新緑に身を包み、紫の花を咲かせ、澆刺として成長して参ります。変わらぬご支援をお願いいたします。

(千田捷熙)

ポローニア
paulownia

vol.2

発行日……平成17(2005)年1月15日
発行者……附属学校教育局教育長 谷川彰英
発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
ポローニア編集委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

編集委員長……篠原吉徳

編集委員……千田捷熙・飯田範子・山本淳子・平川和人

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広研印刷